

1. 地域の概要

表 地域の概要

地理的 位置	国名及び地域	東アジア 日本 徳島県 上勝町												
	緯度経度	北緯 33 度 53 分 20 秒、東経 134 度 24 分 07 秒（上勝町役場）												
	立地条件	<ul style="list-style-type: none"> ・都市域から離れた農山村地域 ・最も近い海から直線距離で約 20km ・東京（首都）から直線距離で約 530km ・徳島市（県庁所在地）から直線距離で約 25km 												
自然 環境	地形及び標高	・上勝町は標高 100m～1500m の山地に位置し、町域の多くが傾斜地となっている。												
	気候（数値は気象庁の平年値）	<ul style="list-style-type: none"> ・町内に気象観測施設は存在しないが、近隣の那珂町木頭における年間平均気温は 13.2 、年間降水量は 3,037mm である。 ・ケッペンの気候区分では Cfb（温暖湿潤気候）に分類される。 												
	植生及び土壌	<ul style="list-style-type: none"> ・町内の約 85% が山林である。主にスギの植林地からなり、一部、アカマツ林やシイ・カシ萌芽林、果樹園等が分布する。 ・山腹の斜面には僅かながら棚田が存在する。 ・土壌は褐色森林土からなる。 												
	生物多様性と生態系の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・既往調査によると、棚田は一般的に畦畔率が高く、異なる物理的構造がモザイク的に配置されているため、草地性植物の種多様性を維持するための場所として高い機能を有していたと考えられる（鎌田、2002）。 ・上勝町においては、棚田は生物多様性保全上、重要な環境であると考えられる。しかし、近年は耕作放棄地が増加するなど、環境が変化しつつある。 ・町の西部に位置する標高 1,438m の高丸山には、ブナの自然林があり、多様な植物が生育している。また、高丸山は町内を流れる主要河川・勝浦川の源流部でもあり、集落の水源林として重要である。 												
社会的 背景	人口	<ul style="list-style-type: none"> ・上勝町の昭和 25 年国勢調査人口は 6,356 人であったが、都市部への人口流出が進み、平成 17 年国勢調査人口は 1,955 人にまで減少している。 ・平成 17 年国勢調査における高齢化率（65 歳以上の人口比率）は 48.5% である。 												
	歴史・文化	・上勝町では、江戸時代に林業がはじまり、主要な木材・薪炭の生産地であった。												
	地域経済	<ul style="list-style-type: none"> ・上勝町は農林業が基幹産業となっている。 ・平成 17 年国勢調査における産業分類別の就業者数は下記の通りである。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>第一次産業（農林水産業）</td> <td style="text-align: center;">414 人</td> <td style="text-align: center;">41.3%</td> </tr> <tr> <td>第二次産業（鉱業、製造業、建設業）</td> <td style="text-align: center;">209 人</td> <td style="text-align: center;">20.8%</td> </tr> <tr> <td>第三次産業（商業、観光業、その他）</td> <td style="text-align: center;">380 人</td> <td style="text-align: center;">37.9%</td> </tr> <tr> <td>合計 下記注を参照</td> <td style="text-align: center;">1,003 人</td> <td style="text-align: center;">100.0%</td> </tr> </table> <p>注：第一次産業～第三次産業の就業者数の比率は、それぞれ小数点以下第二位で四捨五入を行っているため、これらの合計値が 100.0% とならないことがある。</p>		第一次産業（農林水産業）	414 人	41.3%	第二次産業（鉱業、製造業、建設業）	209 人	20.8%	第三次産業（商業、観光業、その他）	380 人	37.9%	合計 下記注を参照	1,003 人
第一次産業（農林水産業）	414 人	41.3%												
第二次産業（鉱業、製造業、建設業）	209 人	20.8%												
第三次産業（商業、観光業、その他）	380 人	37.9%												
合計 下記注を参照	1,003 人	100.0%												

2. 地域の自然資源の利用・管理の実態

(1) 自然資源の利用・管理の経緯と現状

1) 自然資源の利用・管理に関する土地利用の経緯と現状

- ・事例地である上勝町は総面積 10,968ha のうち、山林が 9,373ha (85%)、農地が 224ha (2%) となっている (2005 年現在)。
- ・上勝町のほぼ全域が山地であり、そのほとんどは森林で覆われている。かつては林業が盛んであったため、ほとんどがスギ人工林である。
- ・山腹や谷あいの斜面には水田が開かれているほか、柚子などの果樹園もあり、周辺の森林とともにモザイク状を呈した農村景観が形成されている。

2) 現在の自然資源の利用・管理の目的と内容

- ・農地では食用として米、野菜、果樹などが栽培されるほか、家畜 (鶏) の飼育が行われている。
- ・農地、森林ともに多く存在する地域であるが、森林から堆肥を得て農地に利用するような、森林・農地の資源の循環利用は著しく減少している。
- ・上勝町では特に、エネルギー源としての薪炭が盛んに生産され、主要な産業となっていたが、現在は燃料としての需要は激減している。

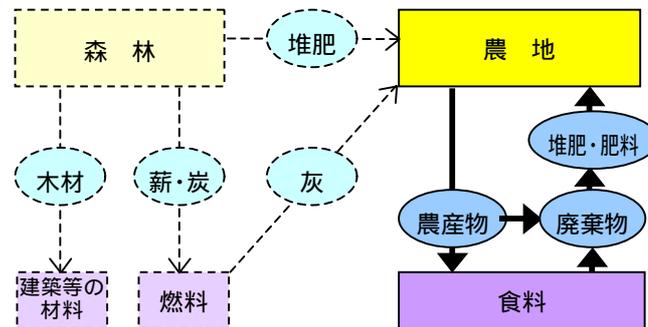


図 自然資源の利用の概要 (淡色及び点線：現在では利用が著しく減少しているもの)

(2) 自然資源の利用・管理の問題点及び生物多様性への影響

【かつての農林業】

- ・上勝町は町域の大部分が山間の傾斜地であるが、山腹の斜面には棚田が開かれ、米と麦・大豆等を栽培する二毛作が営まれていた。棚田が特徴的な農村景観を形作っていた。
- ・町域の大部分は森林であるが、温暖湿潤な気候がスギの生育に適していたため、江戸期から林業が行われていた。その後も、木材・薪炭の需要は多く、上勝町の基幹作業となった。戦後復興や高度経済成長期の住宅建設ラッシュで木材需要が増した際には拡大造林により広範囲にスギが植林された。

【転作や減反による棚田の減少】

- ・1961年に「果樹農業振興特別措置法」が制定され、みかん栽培が盛んに行われるようになった。米より経済性が高く、棚田から果樹園への転作が進むなど主要な収入源となった。
- ・戦後のパン推進の動きから米需要の減少が始まり、次第に裏作ができなくなっていった。ついには生産調整のための減反政策が始まり、米作の維持すら困難になってしまった。これにより町内の棚田は激減した。

【社会経済情勢の変化や災害による農林業の活力低下】

- ・木材輸入の自由化が始まり、安い輸入木材が流通するようになると、国産の木材価格が暴落し、林業が経済活動としてほとんど成り立たなくなった。これにより広大な植林地も管理されなくなり、植林地は下草が生えない「緑の砂漠」と化し、水源涵養、土砂流出防止等の公益的機能の発揮が危ぶまれる状況になってしまった。
- ・みかんの栽培地は西日本を中心に拡大し、大豊作となったことや、バナナやオレンジといった果物の輸入が自由化されたことにより、みかんの価格は暴落した。さらに、未曾有の寒波が上勝に到来し、多くのみかんが枯死したことで、みかん栽培は壊滅してしまった。

(3) 上記問題点の解決に向けた地域計画等

- ・上勝町は、全国一律の政策に従うのではなく、町と町民が一体となって自ら考え、自ら独自の街づくりに挑むため、町民との合意形成を図りながら「上勝町地域活性化振興計画」を策定した。この計画に沿って様々な地域づくりの取組が行われている。

3 . 取組事例の詳細

(1) 取組事例の全体像

上勝町の活性化に向けた様々な取組の中で、町内の様々な植物を採集し「つまもの」(日本料理に装飾として添えられる葉、枝、花など)として販売する「いろどり農業」は、農山村地域における自然資源を活用したビジネスの成功事例として広く知られている。

以下では、この「葉っぱビジネス」について記載する。

表 取組事例の全体像

場所	徳島県 上勝町
関係主体	【土地所有者】地元住民(主に農業者) 【取組の主体】彩部会、上勝町、株式会社いろどり
背景及び経緯	【農林業の現状と経緯】 ・主に林業、棚田での米作、みかん栽培が営まれてきたが、輸入自由化や過疎化など社会状況の煽りを受け、いずれも存続が困難な状況となっている。特に、みかん栽培は寒波の到来により壊滅状態となってしまった。 <i>詳細は「2-(2)自然資源の利用・管理の問題点及び生物多様性への影響」を参照</i> 【いろどり農業の開始と成長】 ・みかん栽培に代わる基幹産業を確立するため、上勝町及び農業協同組合が様々な可能性を模索する中で、上勝にいくらでもある「葉っぱ」を「つまもの」として商品化するアイデアを考え出し、1986年に、4名の農家の協力を得て「つまもの」の販売を試験的に開始した。 ・その後の試行錯誤の結果、徐々に「つまもの」の販売が軌道に乗り、1991年に、第三セクター企業である「株式会社いろどり」を設立した。 ・現在では年商2億6千万円の産業に成長しており、生産者は190名まで増加している。
目的	・持続不可能な現在の社会システムを持続可能なものにするという世界で最も大きな課題を、上勝町という小さな地域において世界で最も早く実現させ、上勝町を世界に誇れる町にする。 ・上記の一環として、町民の福祉及び収入の向上を図るために、町民主役かつ地域の自然資源を活かした「いろどり農業」に取り組む。
主な内容	・主力商品として、紅葉、柿の葉、南天の枝葉、椿の葉、梅・桜・桃の花など、地域で収穫された植物の部位を、日本料理の「つまもの」の販売している。
主な成果	・「いろどり農業」は、町の新たな基幹産業として経済活性化に寄与している。また、視察等の交流人口の増加による経済効果も大きい。 ・町民主役かつ地域の自然資源を活用した産業が、国内ひいては海外からも注目を集めるまでに成長したことにより、町民の間で誇りと自信が醸成されている。 ・高齢者が生き活きと「いろどり農業」に取り組むことにより、生き甲斐を感じながら収入を得ることができ、産業を通じた福祉(産業福祉)が実現している。

(2) SATOYAMAイニシアティブの「5つの視点」から見た自然資源の利用・管理の詳細

本事例と5つの視点の主な関係は、下表に示すとおりである。

このうち、関連度合いが高い視点（表中「 」の項目）について、表の続きに詳細を記載する。

表 本事例と5つの視点の主な関係

5つの視点	本事例との関連	
	関連度合い	関連の主な内容
1) 環境容量・自然復元力の範囲内での利用		<ul style="list-style-type: none"> ・上勝町の標高差が大きい地形条件や、以前からの花木生産を活かし、バリエーション豊富な商品（現在は320種類以上）を長期間出荷している。 以下に詳述
2) 自然資源の循環利用		（特記なし）
3) 地域の伝統・文化の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・「葉っぱビジネス」は、町内で栽培する様々な植物と、伝統的な日本料理に添えられる「つまもの」を結びつけ、新たな市場を開拓することによって実現した。 以下に詳述
4) 多様な主体の参加と協働		<ul style="list-style-type: none"> ・町民、上勝町、農業協同組合などの地域の主体が協力し、町ぐるみでビジネスを展開している。 ・町内外の受発注やコミュニケーションを円滑にするため、情報ネットワークの構築に力が注がれている。 以下に詳述
5) 地域社会・経済への貢献		<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の生き甲斐と収入の両立が可能な産業が創出され、「産業福祉」が実現している。 ・「いんどり農業」は、現在では年商2億6千万円の産業に成長しており、生産者は190名まで増加し、町の経済活性化に寄与している。 ・視察やセミナー等による交流人口増加によって町内産業（宿泊施設や産直市）にも経済効果を生んだ。 ・荒れた耕作放棄地に様々な植物を植えることで、景観・環境保全にも貢献している。 以下に詳述

1) 環境容量・自然復元力の範囲内での利用

【自然・産業の特性を活かした商品展開】

- ・上勝町の農地は標高 100m～700mの高低差があるため、農作物や樹木の種類が多く、また、同じ作物であっても標高に応じて収穫適期が異なるため、多様な植物を長期間供給できる素地があった。
- ・また、上勝町は以前から花木の産地であり、ビニールハウスで枝物を早く開花させて市場に出荷していたため、見た目が美しい園芸品種も豊富であった。
- ・「いんどり農業」では、このような上勝町の自然及び産業の特性を活かし、バリエーション豊富な商品（現在は320種類以上）を長期間出荷している。



写真 「つまもの」の使用例(出典:(株)いろどりホームページ)

3) 地域の伝統・文化の評価

【伝統的な日本料理に添えられる「つまもの」への着目】

- ・上勝町で「いろどり農業」が起業される以前は、「つまもの」の市場は存在せず、料理人自らが野山や庭で採集していた。
- ・発案者の一人である農協職員(現、(株)いろどり代表)は、町内で採れた葉っぱや花を持って、料亭や温泉旅館への営業を行ったが、当時は「つまもの」を購入するという発想がない上に、料理人のニーズを把握できなかったため、なかなか契約を結ぶまでに至らなかった。
- ・その後、時間をかけて調査を行うことにより、ついに「つまもの」に求められる条件を把握し、ビジネスとして軌道に乗せることができた。

4) 多様な主体の参加と協働

【町ぐるみでのビジネス展開】

- ・「いろどり農業」は、当初から町民が利益を得ることができる「地域ビジネス」として計画及び開始され、個々の住民が主役として生産に携わり、行政(上勝町)及び農業協同組合が、サポート及び販売を行っている。
- ・「つまもの」の販売及び流通は、当初は農協を通じ行われていたが、事業が成長するにつれてより組織的な取組が必要となったため、1999年には第三セクター企業「株式会社いろどり」が設立された。
- ・(株)いろどりは、個々の生産者と市場をつなぐ存在として、営業活動、市場と生産者を結ぶ情報提供、受発注を行うための情報ネットワークシステムの運営等を行っている。

【安定供給と販路拡大を可能とした情報ネットワークの構築】

- ・「つまもの」の需要は、行事やイベント等によって注文が大きく増えることがあるなど、変動が大きい。また、新鮮さが不可欠であるため、短時間で商品を準備して発送しなければならない。
- ・このような難しい条件に対応するために、個々の生産農家と迅速かつ的確な受発注を行うための情報ネットワークの構築に力を注いだ。
- ・1992年には、町の防災無線と家庭用ファックスを結びつけたシステムを導入した。さらに1999年には、高齢者でも容易に扱えるように改良したパソコンを開発し、個々の生産者と営業組織・物流拠点・市場を結ぶネットワークシステムを構築した。
- ・こうした取組により、「必要なものを、必要な時に、必要な数だけ」市場に出荷することが可能となり、上勝産の「つまもの」に対する信頼性が向上し、さらなる成長につながった。
- ・また、コンピューターのネットワークシステムは、受発注に利用されるだけでなく、生産者が市

場の状況や自らの取組の成果（売上高や順位等）を見ることができると、意欲の向上や工夫を促すことにも大きく寄与した。

5) 地域社会・経済への貢献

【高齢者の参加による「産業福祉」の実現】

- ・「いもどり農業」は、商品である葉や花を近所で簡単に取ることができ、しかも軽くてかさばらないため、女性や高齢者でも容易に参加することができる。
- ・「いもどり農業」は、当初から女性や高齢者の参加を念頭に置いており、1998年には、参加者が自宅で市場の動向をチェックできるように、1億円の開発費をかけて高齢者でも操作できるように工夫を凝らしたコンピュータシステムを開発し、各参加者の住宅にパソコンを設置した。
- ・現在、「いもどり農業」に参加している190軒のうち、半数以上が女性であり、平均年齢は70歳である。高齢者が葉っぱを採取するために傾斜地を歩き、パソコンに向かって毎日配信される「今日のメッセージ」や売上順位等を見ながら「明日は何を出荷しよう、今度は何を植えよう」と考えることは、高齢者の生きがいになり、また、認知症の予防にもつながっている。
- ・このような取組を通じて、お年寄りが仕事を持ち、それを生きがいとする「産業福祉」が実現した。

【その他地域社会・経済の活性化への貢献】

- ・「いもどり農業」は、現在では年商2億6千万円の産業に成長しており、商品は京阪神や首都圏など全国各地に出荷されており、全国の「つまもの」市場のうち約8割のシェアを占めている。
- ・生産者数は当初の4人から190軒まで増加しており、町の経済活性化に大きく寄与している。個々の生産者にとって、手軽に参加でき、すぐに収入が得られ、しかも工夫次第で収入を増やすことができるため、魅力が大きいビジネスとなっている。
- ・「いもどり農業」やその他の様々な取組が成果を収めたことにより、上勝町は国内ひいては海外からも注目を集めるようになり、町民一人ひとりが上勝町民であることに自身と誇りを持つようになった。



写真 いもどり農業を支える生産者（出典：(株)いもどりホームページ）

以上

参考文献等

- ・株式会社いもどりホームページ（URL：<http://www.irodori.co.jp/>）
- ・笠松和市、佐藤由美（2008）「持続可能なまち小さく美しく 上勝町の挑戦」